



# 妖雲



川崎ゆきお

海の彼方に神がいる。山の彼方に神がいる。海に神が いる。山に神がいる。いずれも海や山が見える場所でないと、神を感じないかもしれない。見渡す限り山また山だと海は見えない。山の上に登っても、まだ見えない。こういう状態では海の彼方に神がいる、などの発想はないだろう。ただ、山の人達も海を知っている。山の神に飽きて、見知らぬ海の神を信仰することがあるかもしれない。ただ、そうすると抽象性が高くなる。具体的なものがないだけに。

山がなく、海も湖もなくとも、空はある。日や月や星はある。ここは世界共通かもしれない。

「星を見ますか」

「星ですか」

「そうです」

「滅多に見ませんねえ」

「月は」

「目立つので、たまに見ます。たまに見る程度なので、形が毎回違いますねえ。イメージとしては丸いのですが」

「日は」

「太陽ですか」

「そうです」

「朝日や夕日をたまに見ますねえ。昼間は眩しいので、見ませんが」

「星の動き、太陽や月の動きには何かがあります」

「ああ、占いの定番でしょ。それに生年月日を組み合わせると、運命が分かるとか」

「四柱推命ですね」

「しかし、僕はそれができないのです。誕生日は分かっているのですが時間が分からない」

「記録にあるでしょ。産科の」

「家で生まれたのです。産婆さんに取り上げられました」

「そうなのですか」

「それで時間なんですけど、朝方だったと母親は言ってましたが、時間までは分かっているようですよ。朝と言っても何時かまでは分からないのです」

「まあ、そういう占いとは違い、天気占いがあります。聞きますか」

「天気ですか」

「天文方、これは昔からそういう役所があって、星の動きなどを観察していました」

「そうなんですか」

「それなら、ありふれています。そうではなく、空を見て占うのです。朝でも良いし、昼でもいい。星が見えなくてもいい」

「はい」

「特に注意するのは妖雲です」

「妖しい雲ですか」

「そうです。妙な形をした雲が現れると、これは異変の前触れです。特に妖雲は不吉なものだと言われています」

「それは雲占いですか」

「相としては分かりやすいですからね」

「手相人相ではなく、雲相ですね」

「これを空想とも言います」

「そこへ来ますか」

「ただ、これは個人の相ではなく、世の中の相なのです。だから世相」

「ほう」

「天地がひっくり返るような大きな災害や事変が分かるらしいです」

「らしい程度ですか」

「当然誰でも読めるわけではありません。天を見て下界が分かるのです」

「ほう」

「これを世相を読むと言います」

「お話しはよく分かりますが、まあ、空想しているだけなんですよ」

「はい、簡単に言えば」

「はいはい」

「しかし、妖雲が浮かぶ空をじっと見ていれば、天啓を得ることもあります」

「それも空想のうちですね」

「はい、まあ、そうです」

了